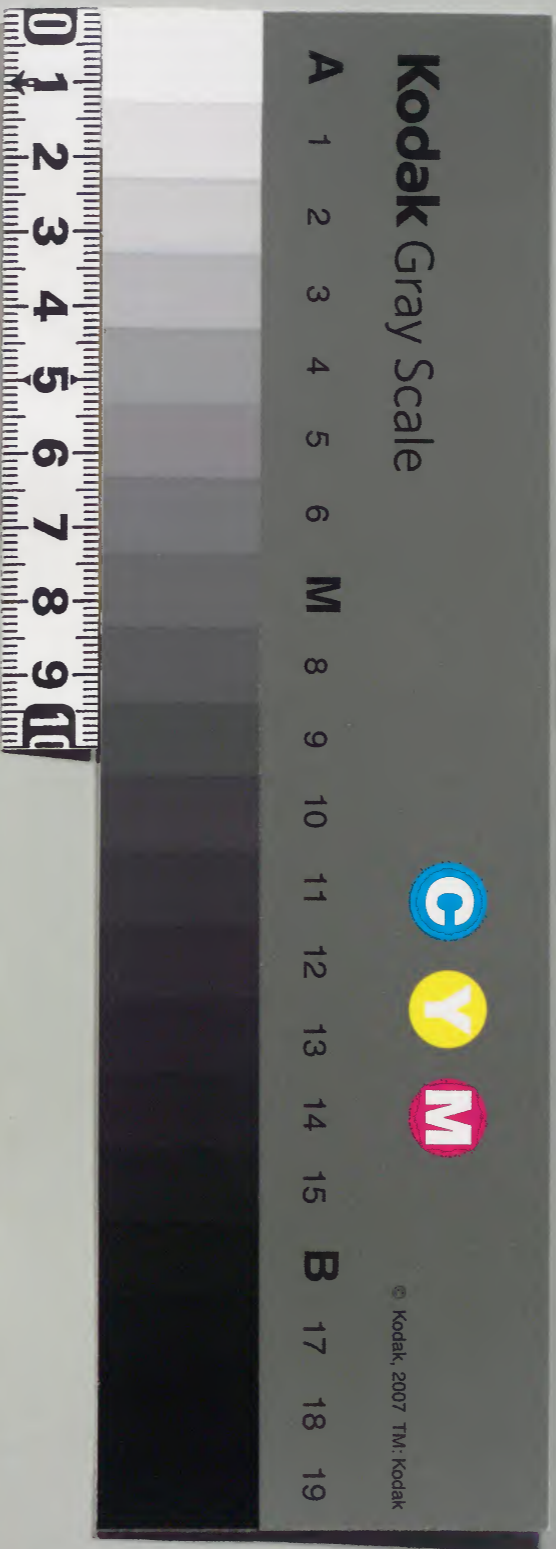
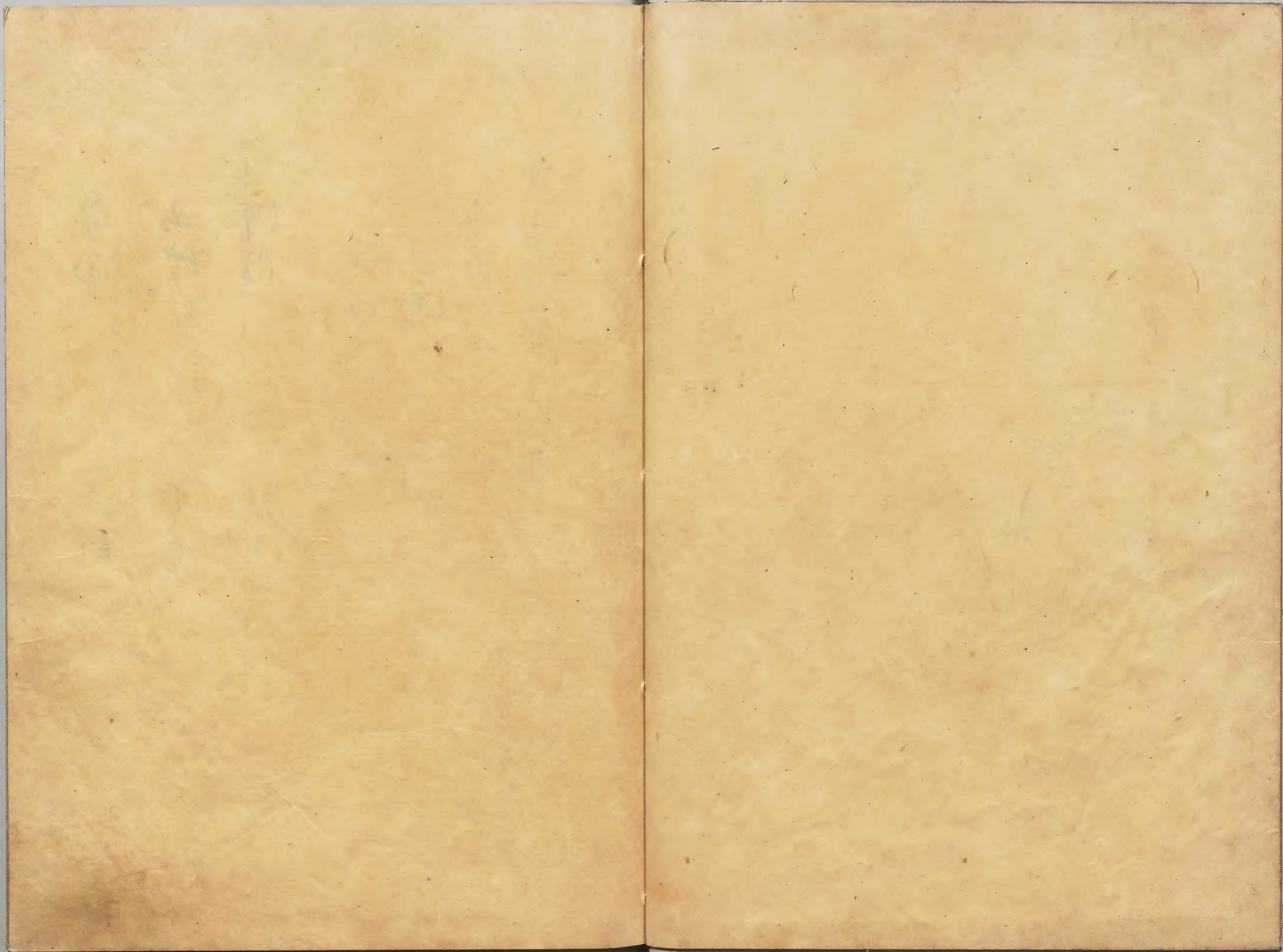


寛永諸家譜

平氏十九冊之内  
五流

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186 ( 81 )	
函號	特	76 1





安西

山中

河内

美野

野色

飯河

寛永諸家系圖傳

平氏

支流

安西

●安次

源右衛門尉

今川義元

淺草文庫

安勝やすかつ

赤古巻あかこまき

しどのは小笠原弾正こがさわのりまさよりしよ

そのうち

大指環をよび

右徳院殿よりしよきくまつ

きよ長十八よひ七十七しちあ

死し

元真もとまこと

甚兵衛尉じんべゑ

きよ長九年十四歳しよあ

右徳院殿よりしよきくまつしち七歳

しよしよ焼火やきびのま間まよりしよ

元和九年げんわ

將軍家よりしよきくまつしよ

寛永九年かんゑいよりしよ小納戸こなご乃湯番ゆばんよりしよ

元玄

同十五年子八百石の地より  
同十六年八百石の地より  
すべし千二百石を飲と  
同十八年布衣と云すりし事より

赤十郎 中園武茂

寛永十一年三月より

將軍家より赤湯一斗てしり

元仙

次郎兵衛

寛永十四年より赤書院書を以て

いまだ石川備前守組より

赤小姓組の書より入食禄を以て

同十二年六月より赤書院組乃赤書  
とつ中の食禄を以てしり  
組より

家<sup>ノ</sup>乃<sup>ハ</sup>紋<sup>ノ</sup>訂<sup>ス</sup>貫<sup>ス</sup>

集

安西

楠七郎左衛門 中園安房

小糸氏 由一 氏

元和九年七十一 死

法名 記

正重

兵部ついでらりて安西かんせいと称なづせし生國なまくには  
越後えちごの將しやうにふりて後のちは

右みぎ徳院とくゐん殿のりに之これをてまつ

寛永かんえい十じゅうにに大坂おさか涉せつ書しょ下くだりて

死しと歳とし五ご十五じゅうご

定之

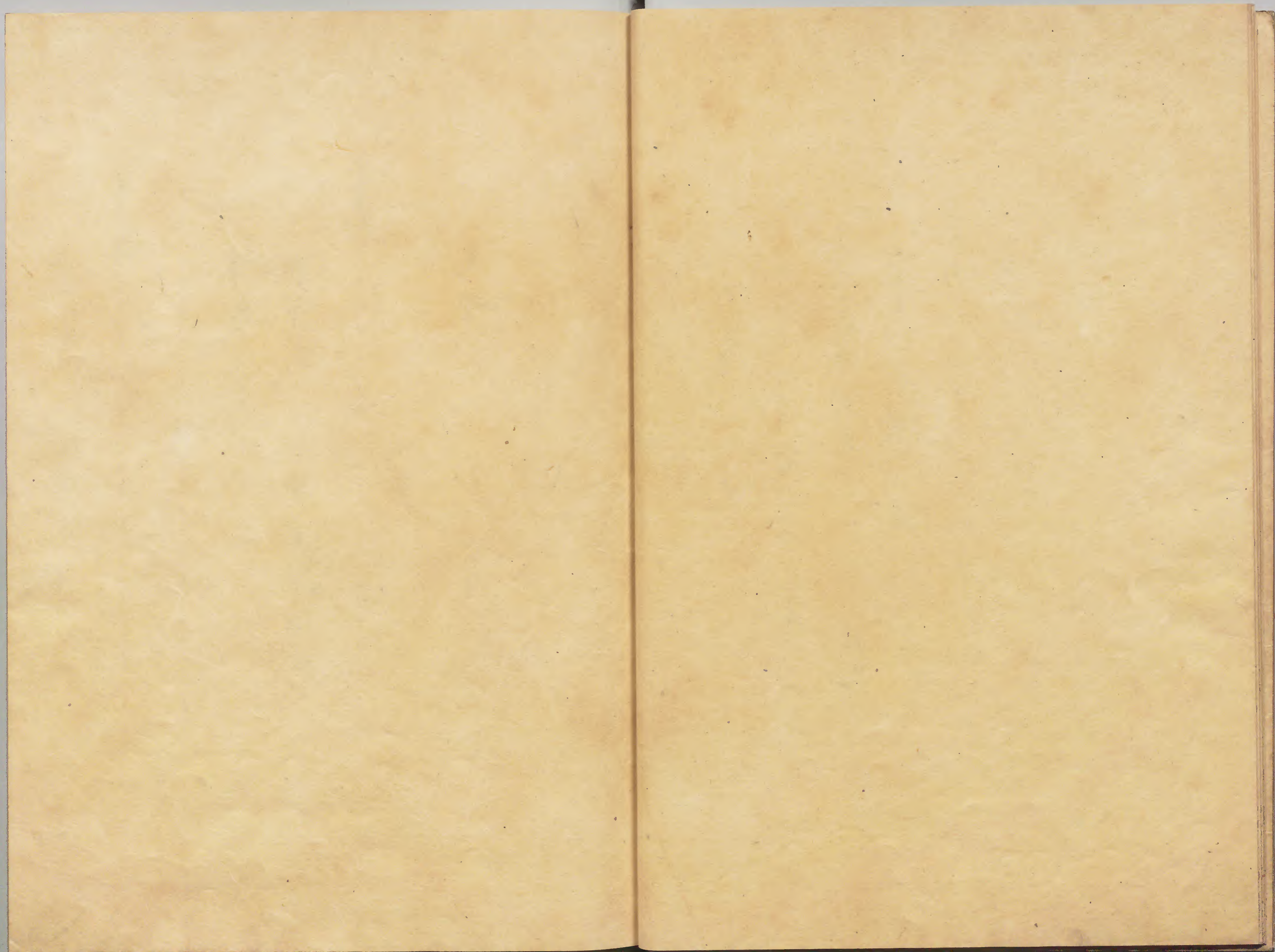
六角かくかくし忠ただ興きやう

實じつと大久保おおくぼ者もの之の部べ正城せいじやうが子こなり

寛永かんえい十じゅう五ご年ねん十二じふに月げつ 御命ごめいよりて

正重せいじゆうが家督けとくを継ついで





●  
重政しげまさ

美野みの

令古夷しんこゑ 中尾張富塚なこうち  
佐長さなが 河内かみ

守吉しゅきち

令古夷しんこゑ

中尾張なこうち

伝長つたながより治ふ  
元龜げんき二年より病死

重家しげ

令古妻いんこ 中園同好

号の長七年より

大権現おほごんげんよりつゝ人きてもつ

寛永二年より病死

重則しげのり

世古妻よこ 中園ちゆうえん尾法おしほ清例きよれい

大権現おほごんげんをよび

右徳院みぎとくゐん殿

將軍家しやうぐんけより治ふまつ

寛永十六年より病死

守勝しゆしやう

九条くじやう 中園同好

大樽現とよび

台酒院敵

將軍家よりはくをてまつる

雲成うんせい

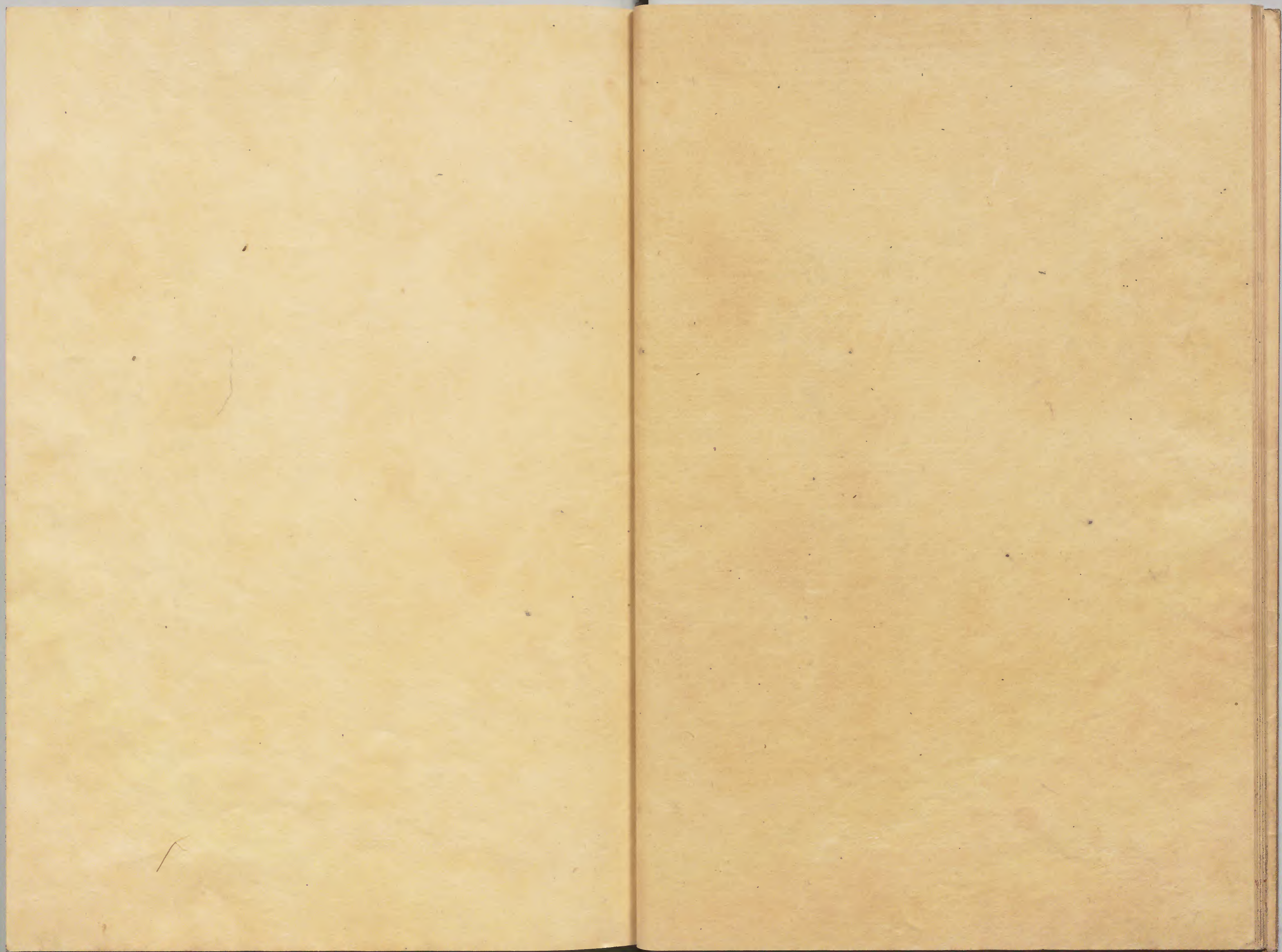
新太郎

世國武蔵いさくに江戸

寛永十六年かんえいじゅうろくにん

將軍家よりはくをてまつる

家乃紋いへ義荷よしの丸まる



●  
氏頼

山中

近江守

中回相模

ちどりの夜之好 沈元より之 京船 畠山  
合戦乃 付軍 田あり 是れ 舟にて 沈元  
沈文と 授今り 舟く 是を 取持と  
沈元 遊去 此後 小糸 早雲 有り 志す

山駿列りしは是より東小森  
了はふ 法名理尊

頼次

秋田節 後日通物と号しし中田節  
小條氏康よりはふ  
天文十年川越田中務丸合戦はよいて  
軍忠を抽け是よりして同十有二日  
氏康より感状をよむる事今も所持と

永禄六年十二月二日氏政より頼次を  
しそ一塚を海りしはこれなり  
よりし書をよむる事今も有りあり  
法名道源

頼元

大炊助 中田節  
永禄十二年隆隆よといて甲斐相摸乃  
兵討陣の時軍四あり且又蒲原よ

とひく要害をうまし頼元四阿月  
るがゆり同の同五月之日氏政書  
とたもふ

天正四年二月之日氏政院文を  
海らる今有りあり 法名榮周

貞元

源右衛門 後勒古書と号す

天正十七年十二月十五日氏重譯

乃字をいふ院文是あり

氏重没落の候

大権現園東沖入園乃付り  
開戸の郷りといふ  
法名道無

貞利

七た集



元次もとつぐ

歌口部

牛國山城ウシクニノヤマシロ

寛永九年九月廿一日

將軍家より此へ之を申上り書あつた

此へ

利次りつぎ

五節集

集

山中

上野

何の月小條氏康おほく之浦厨子  
 城とありふは氏康の命より  
 貞濃守り居る家老とれり  
 小田原飛城のとき之浦の城あり

小田原没落のときと浦上城をめぐりて  
新田宗満を帝り授

来

被埋

初は矢張書下届一並山に城り居て  
天正十八年小田原没落の時並山に城り居  
回十九年奥羽沙陣乃ときと  
はりといふ

元吉

大指現り錫見一はく  
慶長七年より病死

一節古事

天文長七年

右徳院殿より錫見一はく  
はりといふ

元茂 もとしげ

右大進 十四後河 とくが

寛永十八年三月

將軍家より賜へし

家乃紋圖の内よ上羽の條 いえのもんずみのうちよかみうのじょう

山中やまのちゆう

●信實のぶざつ

令古夷いん 什四しよ之河が

台實たいじつ

令七島しちとう 牛四しよ日にち矣や

信之

七系 十國武苑

寛永九年

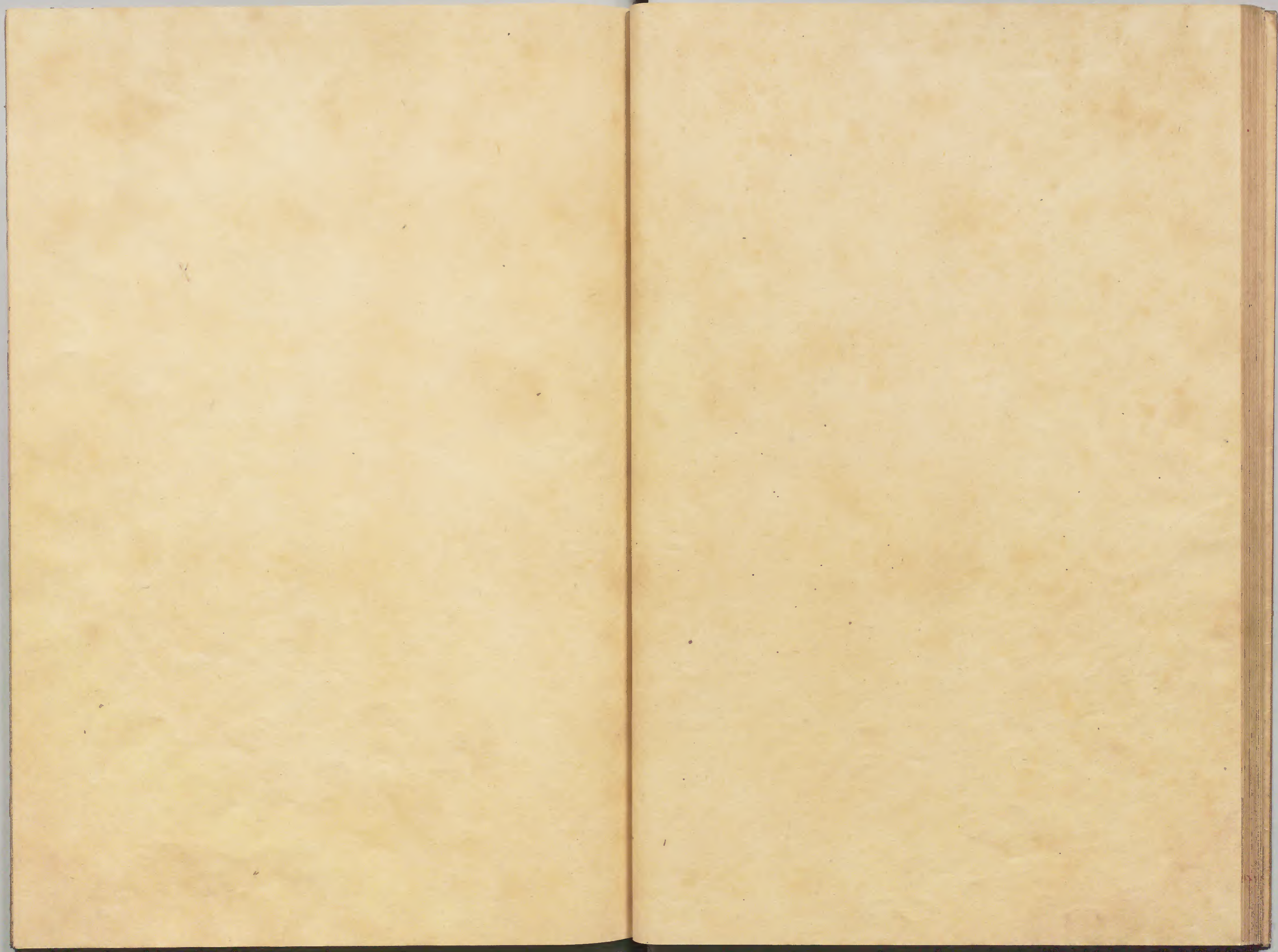
將軍家より信之へ

信安

七系 十國同安

將軍家より信之へ

家代致圖の内より二行



正則

平荒 後越 存 十國遠江野色の底  
伝長 一 伝ふ

野邊

正久

傳十郎 十國尾張



大指現より此へくま川終  
長十年三月之白も病死

當經あきら

助左衛門 中國回京

大指現をよむ

右徳院殿

將軍家より此へくま川終

心要こころ

徳左衛門 櫻川津より此へ

大指現をよむ

右徳院殿

將軍家より此へくま川終

當忠あきら

唐之助 牛田山城

右徳院殿

將軍家より  
しるす

正及

七十島

生國武苑

寛永十五年

將軍家より  
しるす

家紋  
格

河内こうい

● 常親とこ

但馬守たじまのり

中園下なかつゆり 總とと

總とと 列り 千葉ちば 介すけ 了り 河内こうい

知親ちか

与兼よと

右みぎ 邊へ

中園武なかつゆり 院いん

子業次節よりきつひのち  
大指規よりほくくまらる

流盛りゅうせい

とそ束せ四回分

大指規をよび

名徳院殿

將軍家よりつとをそまらる

流次りゅうじ

沐在集せ四回分

名徳院殿をよび

將軍家よりほくくまらる

久次きゅうじ

長た集せ四回分

將軍家よりほくくまらる

名久

八景 中園武苑

実父を之浦権大夫と号しとせ必甲斐

千葉介よに子名久幼女あ〜く父

とられ伯留流盛が書子となりて

將軍家よりけ〜〜〜

孝長十一年十一月廿七日 実父經父

死と 法名霜天仙峯

流正

徳七郎 中園回宗

寛永八年六月〜〜

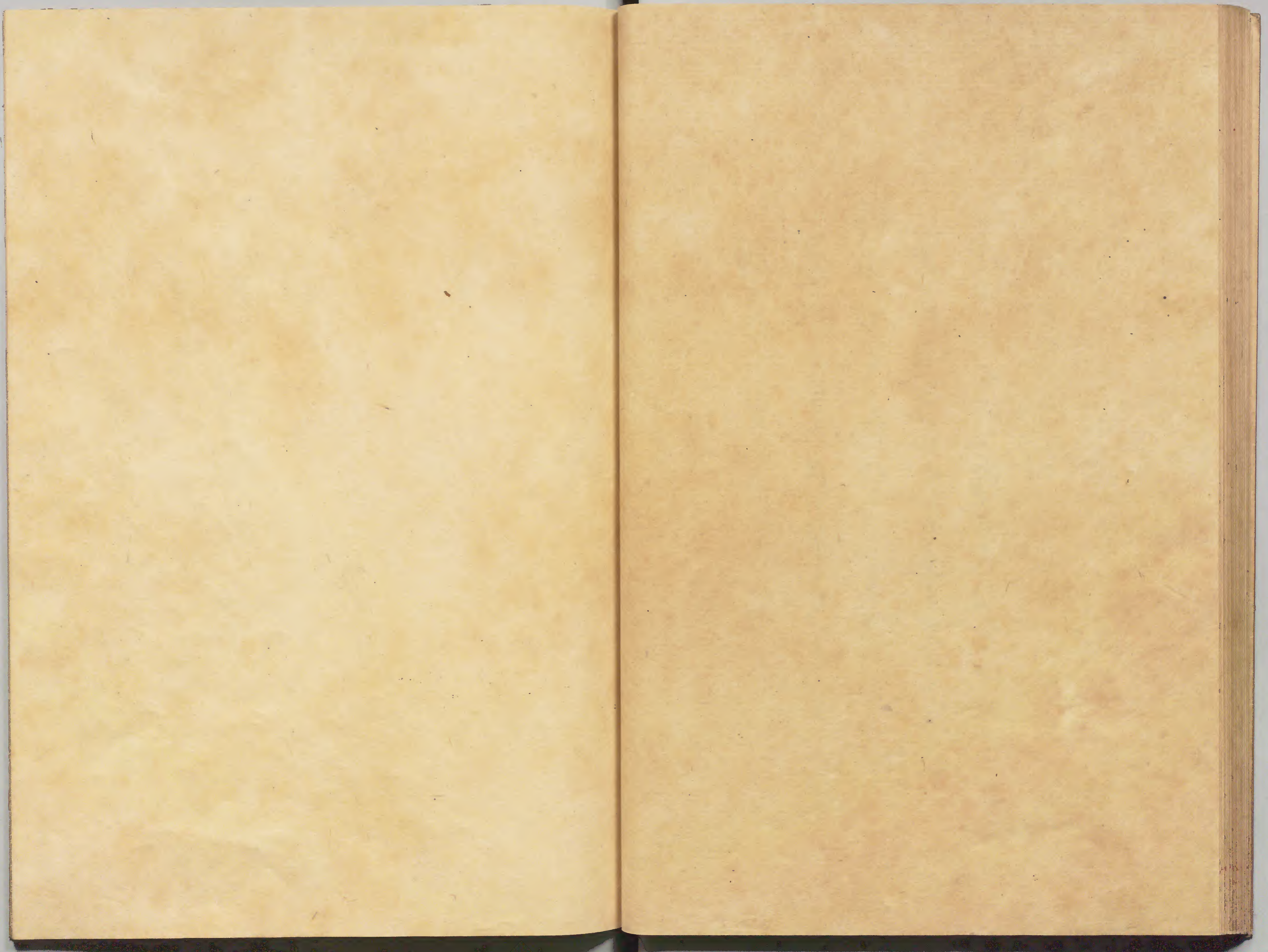
將軍家より賜〜〜〜

翌年五月より大御書よに

回十六子 作り〜〜〜

此後よに

家の紋梅内



河内

●  
信次しんじ

源次郎 中国之河

大樽現より河之岸にて多例あり

孝長七年之月は病死歳五十六

法名しんじ法善しんぜん





河内

● 集

勅諭節

中國之河

大権現

右徳院殿并此ノ事ニ付テ

法名自伝

正次ただつぎ

長助

實ゆんいふく川が甚しきま束づみなり外祖の父が

勅しくし郎ま成て子と守し甚しきま束づみを水せ

射馬ありあり

家い致く九ま曜の早り

飯河

● 盛定

新古志の村

生田次濃

万松院義晴（そのうち）に之（ひら）の常陸國

了（そのうち）りて小田天菴氏治（そのうち）より

永禄五年氏治依竹義守と合戦

のとき討死

盛政

新右衛門 中園常陸

天正三年 出立

東照大権現 湯

同十二年 四月 長久寺 陣

同十八年 小田原 陣

予て

同十九年 奥列 陣

慶長五年 三回 陣

台述院 敵

同十一年 六月 晦日 母死 歳五十二

法名 宗休

盛政

若次郎 生田遠江

参上 長七年 十六歳 御

台述院 敵

同十九年大坂御陣より供奉  
同二十年大坂御陣の時江戸に  
番とけとてしるす

將軍家よりはくしそまへり

盛直

云物 十四武苑

名連院殿の命よりよみて駿河西相  
忠長にりしにふそのち

將軍家よりはくしそまへり

寛永十一年四月九日より死す

歳四十二 法名常盤

盛直

兵十郎 新七郎尉 十四回前

号長十五年より

名連院殿よりはくしそまへり

同十九年大坂御陣より供奉

聖年大坂御陣江戸よりをひく  
賊番とに吹しそりち

將軍家より之へまつる

寛永十五年六月十六日十六り

て死と 法名合禪（見ほう）

方好（ほうこう）

長尾 生國同家

長尾十九年より

右徳院より之へまつる

同年大坂御陣より供奉

元和元年兄盛政と同日江戸（おとう） 城番（おとせ）

とに吹しそりち

將軍家より之へまつる

盛次（もりつぐ）

五十郎 生國同家

將軍家より之へまつる

寛永五年二月晦日廿七歳歿  
死と 法名宗忠

直信

兵十郎 新太孫尉 廿四回年

寛永八年六月廿五日在任十歳

少くとも

將軍家より賜

同十年六月朔日より沙書を授む

盛系

山之部 廿四回年

寛永九年八月廿一日十二歳

〜

將軍家より賜

同十五年十一月廿日より沙書を授む

家七 致九 曜早

